



Q132. 発達障がいとは治るものなの？



A. 治ることはないし、治す必要もないんだ。

人はそれぞれ何らかの特性を持って生まれてきていて、それはさまざまな形で表面化してくるんだ。

人と関係性を持つことが苦手だったり、掃除や片付けが苦手だったり、勉強が苦手だったりだね。

その程度は人によって違っていて、特性を持ちながら問題なく生活できている人も居たりするよ。

その一方で、特性が障がいとなってしまって困ったことが多くて生きづらさを感じ、生活を続けていくのが難しい人は「[発達障害](#)」と診断されるんだ。

極論だけど、特性があっても困ってなくて生活に支障がなければ「発達障害」とは言えないね。でも、特性をまったく持たずに生まれてきた人のほうが珍しいかもしれないけれど。

特性それ自体は持って生まれてきたもので、なくなることはないよ。

病気というわけではないので、治療することはできないから「治る」ということもあり得ない。

このことを指して海外では、ずーっと一緒に生きていく「個性」という表現で呼ぶことが多いんだ。

特性が障がいとなって生きづらさを感じる状態、を「発達障害」というのだったね。

この生きづらさが積み重なると精神症状や身体症状として出てしまうことがあって、それを[二次障がい\(二次的な問題\)](#)と呼んでいるよ。

特性を持っていて「発達障害」です、と診断を受けたら、まず気を付けなければいけないことはこの二次障がいを予防することなんだ。

福祉では「困ったことをする人は、困っている人」という言葉があるよ。

困らせてやろう、としているんじゃないで、自分が困っているから、それがそのまま自分の行動に出てしまうんだね。

悪気なくやったことに対して、注意されたり直されたりし続けると、大きなストレスになってしまうんだ。

周囲にいる友だちとうまくいかないことがあったとしても、それは発達障がいのある人のせいではないよ。

発達障がいの原因で起こるいろいろな困りごとは、本人の努力ではどうすることもできないんだ。

そこで、困りごとが出てきたときの対処の方法を[放課後等デイサービス](#)や[児童発達支援](#)で習得していくんだね。

特性が特性のままだとそんなに困ることはないよ。

でも、特性が何かにひっかかってストレスになってしまうと、二次障がいとなって出てきてしまい困ることになってしまう。

この引っかかってしまう何か、を探して取り除いていきたいんだ。

発達障がいのある人が、[周りに合わせて自分を変えよう](#)と無理をしてしまうと必ず苦しくなってしまうよ。

自分の好きなことや興味のあるものに焦点を合わせて、生活を自分に引き寄せていくんだ。
やりたいことをやって”できた”という気持ちを持つことが自己肯定感を高めていくからね。

経験値をあまり持っていない子どもだけだと、自己肯定感を自分だけで高めていくのはなかなかハードルが高いよ。

児童発達支援や放課後等デイサービスの、専門職としての[療育](#)がここで必要になってくる。
その場所で「自分でできる」ことを探して、経験値を上げていくんだね。

なので、子どもに関わっている大人は、自分の考えを押し付けちゃいけないんだ。

「(自分でやりたいから)手伝って」と言ってくるのを、大人は待てなくちゃいけない。

[子どもだから](#)解らない、だの、大人だから解っている、というのはおかしい考え方だよ。

児童福祉は、[子どもの最善の利益](#)、を追及していくところにあるから、ちゃんと[子どもの意見を聞いて](#)いかななくてはいけないね。

[《MENU》](#)

[《発達障がいの二次障がいってというのは？》](#)

[《幼児期の療育というのは？》](#)

放課後等デイサービス支援事業
Support Project of
Day-service for After-school
At Kyoto

2023-05-15 掲載